令和5年度新里福寿大学

第9回講座

「リアルのゆくえ」

（足利市立美術館）

令和5年 12 月 12日
新里総合センター3階大会議室

新里福寿大学の第９回講座は、恒例となっている美術館シリーズの第３弾、足利市立美術館による講座で「リアルのゆくえ」です。

江尻先生により、足利美術館の写真を交えて施設の概要をお話いただきました。美術館の建物は、１１階建てで上の部分が住宅となっており、３階から下が美術館になっているそうです。経緯として市街地の活性化のために建てられた住宅で下の部分に能楽堂やデパートを入れる案もあったが、公演回数が少ないことやデパートも撤退ぎみであったことから、結果的に美術館が入ることになったそうです。作った当初は、火や水を使う住宅の下に美術品を飾るのは、だめではないかと言われたが、近頃は、そんなに厳しくなくなっていて、重要なものも展示できるようになっている等の裏話を聞かせていただきました。

石原副館長の挨拶

足利美術館の江尻次長

講座風景

絵画のリアル（写実）を考えていくにあたり、彫刻に写実の本質があるのではないかと考えているそうです。古くは、依り代・形代に写実がみられ、平安時代の霊木化現仏には、霊魂がいて、震えている表現をノミの痕で波打たせて表すという日本独自の感覚がみられる。鎌倉時代の運慶の作品には、本覚思想（人はそのままで、悟りを開いており、魂あるものすべてもう悟っている成仏できますよ。この身のまま写せば仏様になりますよという思想）がみられること。同じく鎌倉時代には、仏様が生身の形で人を救いに来るという生身思想があるそうです。

日本の昔話でみられるように彫刻の鶴が動いて悪さをした等の話があるように、この国のリアル（写実）には、霊魂が宿ってしまうという発想があり、本当に素晴らしいものは、動きだすという考えがあるそうです。

西洋は、美しい体、人が美術で、ミケランジェロの作品が動きだしたという昔話等なくリアルに魂が宿るという考えがないのだそうです。

リアルが日本古来からの思想に基づいて、日本人に根付いたものであったのかと初めて認識しました。着眼点が素晴らしく目から鱗でした。

受講生の皆さんも真剣に聞き入っていました。

江尻先生、わかりやすく丁寧にお話いただき本当にありがとうございました。皆さんも美術館に足を運んではいかがでしょうか。